

部屋の呼称は個人の住居内空間に対する考え方を表すことが示されてきたが、行動との関係についての詳しい分析はあまりない。そこで、本研究では、住まいにおける行動空間とその呼称との関係を通して、住空間内の各行動空間に対する居住者の考え方を分析した。

他の調査（注）で得られた1029例の部屋の呼称とそこでの日常行動（32種類）の分析から以下の所見が得られた。なお、回答者は大学生（152名。内女子が143名）であるが、回答に際しては「家族でどのように呼んでいるか」を答えさせた。

①部屋の呼称は大きく一般的呼称、所有者による呼称、特定の家具による呼称、部屋の構造や造りによる呼称、部屋の位置による呼称、部屋の広さによる呼称に分類できた。②住まいの混み合い度との関係では、それが低い家庭ほど一般的呼称とくに伝統的呼称（座敷、納戸など）が多い。③逆にそうした家庭では所有者名の呼称が相対的に少ない。これらは住まいの条件にかかわらず、私室確保の欲求が強いことを示唆する。④就寝空間は所有者名で示されるが、両親の就寝空間ではこれが弱い。⑤団らん空間の呼称は「居間」が多いが、「TVの部屋」がそれに次いで多い。⑥接客空間はさまざまに呼ばれ、「応接間」は必ずしも接客空間を意味しない。⑦伝統的な「座敷」は接客空間よりも「空きの部屋」を示す。⑧特定の行為と結びつかない部屋は広さや方位で示される。

以上は、現代の住空間における私的空間の確保、親の空間の相対的未確立、接客空間の曖昧さを認知レベルで示すと同時に、住空間の伝統的認識様式の弱まりを示唆している。

（注）Journal of Environmental Psychology, 1992, vol.12, 259-267